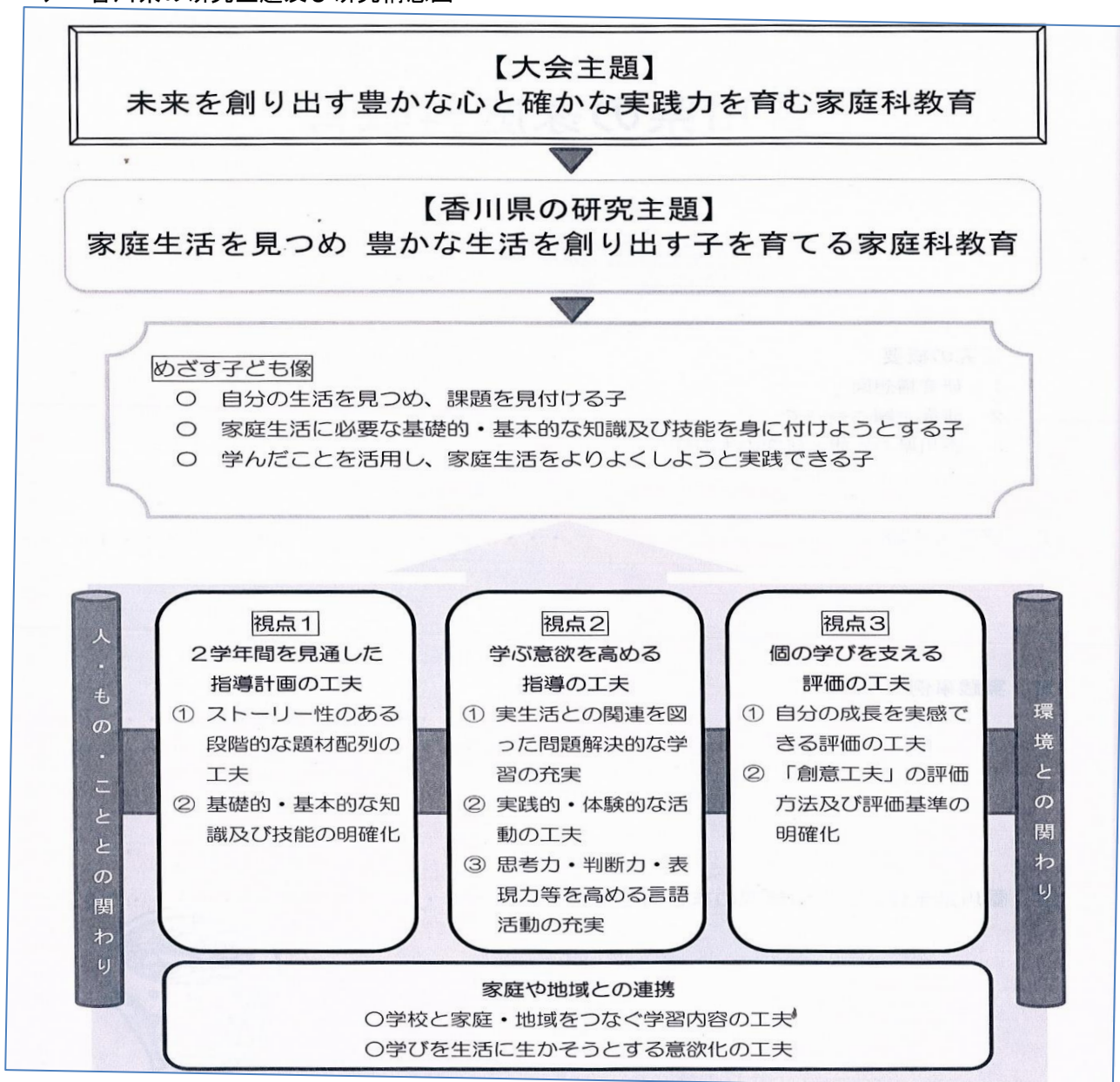


(3) 第16回 中四国小学校家庭科教育研究大会 香川大会 参加報告

ア 香川県の研究主題及び研究構想図



イ 香川県の取組

香川県は、「視点1 2学年間を見通した指導計画の工夫」「視点2 学ぶ意欲を高める指導の工夫」「視点3 個の学びを支える評価の工夫」という3つの視点で研究に取り組んでいた。それを受けて、本大会の発表校の坂出小学校は、「視点1 学びのつながりを意識した題材、指導計画の工夫」「視点2 学びのときめきを味わう学習指導の工夫」「視点3 「生かす」場を広げる家庭・地域との連携」を基に研究を進めていた。

**【学びのつながりを意識した題材、指導計画の工夫】**

5・6年のストーリー性のある題材配列を工夫し、年間指導計画を作成していた。また、1～4年の家庭科に関連する指導事項を明確にし、つながりを意識して指導できるようにしていた。さらに、家庭科の小中5年間を見通し、他教科等や学校生活と関連させた指導計画を作成するなど、学びのつながりを意識した年間指導計画の工夫をしていた(資料1)。また、確実な力の定着のために、他教科等と関連させながら、教師が学びのつながりを意識して授業ができるように、学習指導案に題材と他教科等や学校行事等とのつながりを学年を超えて明記するようしていた。

家庭科年間指導計画				坂出市立坂出小学校第6学年					
ストーリー	月	題材名	小題材名	時数	内容項目	他学年・他教科等との関連	他教科等との関連	実施・地場との連携	中学校【家庭分野】
		私の仕事と生活	家庭の仕事をしていますか	1	A(1)ア A(2)ア、イ	①生活(家族の一員として自分のできること) ②道徳(家族愛、家族の一員としての自覚) ③生活(自分の成長への気付き) ④社会(地域の人々とのつながり) ⑤道徳(家族のために自分のできること) ⑥学活(家族の大切さ) ⑦道徳(家族への思いやり)	・道徳(望ましい生活習慣、家族に協力しようとする心) ・道徳(お茶を通して知った日本の心)	いい日 実行日 (通年)	A(1)ア自分の成長と家族や家庭生活との関わり A(2)ア家庭や家族の基本的な機能、家庭生活と地域とのかかわり A(2)イこれからの自分と家族、家族関係をよりよくする方法
	5	朝食から健康な1日の生活を	食べた いたため朝食のおかずを作ろう 朝食から健康な生活を始めよう	1 8 1	B(1)イ B(2)イ B(3)ア、ウ	①国語(野菜への関心) ②国語(日本の郷土料理への理解・関心) ③生活(野菜への関心、世話と収穫の喜び) ④算数(いろいろな物の重さ) ⑤道徳(地域の野菜への関心、苦労と喜び) ⑥理科(沸騰) ⑦保健(よりよい成長のための食事) ⑧学活(朝食で心も体も元気いっぱい) ⑨社会(食べ物の産地等への関心)	・道徳(食べ物への関心、収穫への喜びと喜び) ・理科(食事の役割) ・社会(稲作の歴史、日本の食の歴史)	お弁当の日	中学校家庭分野へのつながりを意識して、学習指導要領の文言を明記。

〈資料1 坂出小学校の家庭科年間計画〉

【学びのときめきを味わう学習指導の工夫】

学びのときめきを味わう学習指導の工夫として、5点の成果を挙げていた。

1点目は「実感を伴う理解へとつなげる教具や資料の提示」である。6学年の家庭科では、見ただけでは分からない洋服の汚れをニンヒドリン試薬で可視化するという実験活動を取り入れることで科学的思考を深めることができるようにしていた。また、1年生の生活科の学習において、普段の生活の中でよく触れているタオルや靴下のたたみ方のコツを見つけた後、給食エプロンをたたむ活動を取り入れ、実感を伴う理解へと結び付くようにしていた。学校生活の中だけではなく、家庭生活へと広がり、「お手伝いをしたい」という意欲へとつながっていた。

2点目は「思考の可視化の工夫」である。栄養バランスの偏りを可視化するため、ワークシートに3つのグループと同じ赤・黄・緑色のシールを貼る活動を取り入れたり、スナック菓子の油の量や1日に適切なおやつを量と共に見ながら説明を聞いたりしていた。情報を可視化することで、児童自身も自分の考えを整理することができ、思考力を育むことにつながっていた。

3点目は「交流の工夫」である。役割演技やペア、グループでの話し合い、KJ法の導入など、様々な工夫をしていた。ホワイトボードの上で食品絵カードを操作しながら話し合うなど、主体的に子どもたち同士で交流ができるようにしていた。

4点目は「児童自身の課題を明確にするワークシートと考えを深める板書の工夫」である。児童が事前に家庭生活や学校生活を見つめ直し、課題をマトリックスを使ったワークシートで可視化することにより、児童自身が自分のこととして学習に向かうことができるようにしていた。5年生の家庭科で、物の選び方・買い方を考える場面では、児童のワークシートと対応させた板書にすることで、自分や友達の考えと比較しながら意見が活発に交わされていた。

5点目は「栄養教諭によるティームティーチング」である。食に関する内容の場合は、専門的な知識をもつ栄養教諭に話してもらったり、学校給食を生きた教材として活用し、授業内容と関連させて指導したりしていた。

【「生かす」場を広げる家庭・地域との連携】

家庭との関わりで「生かす」場として、「いい日実行日」として家の手伝いや地域のボランティア活動に積極的に参加する日を設定したり、家庭との関わりを「深める」場として、香川県教育委員会から発行されている「自分でできるよ！チャレンジカード」を活用して、学校と地域との連携を図っていた。チャレンジシートの項目は、「お手伝いをする」から「自分で決めたお手伝いをする」「自分が今できる家での役割」「自分でできるようになりたい家での役割」のように、発達段階によって内容が高次なものになっていた。また、地域との関わりで「生かす」場も設定しており、総合的な学習の時間に商店街での模擬店「パワフルマーケット」を開くなど、家庭科とつないで指導していた。

ウ 記念講演「つなげる ひろげる を意識した食の指導の在り方」横浜国立大学教育学部学部長杉山久仁子氏より

食育の全体計画を立てて学校全体で取り組む必要性や家庭科の学習についてご指導いただいた。家庭科の学習については主に3点あった。①家庭科学習の内容はスパイラルに繰り返されるが、段階による目標が必要であり、小学校と中学校のすみ分けを確実にしておくことが大切であるということ、②考え方を教えることが大切であり、例えばみそ汁の実を何にするかにも意図があり、他の実でも生かすことができるようにすること、③最後は必ず自分の生活に戻って考えることができるようにすることである。新学習指導要領の内容とともに、家庭科の指導方法について改めて考えることができた。